

真昼の中に

その真昼の風景は没落の味がした
仕事をする者たちのほとんどは
何らかの箱の中に隠れ棲んでいた
陽光を怖れるかのように
一日の全てを夜とするために

僕は陽光の中では何も求めなかった
僕を貪欲にするものは夜だけだ
人間が寄り添い合おうとするのも
また、夜の中においてのみなのだ
知るがいい、この没落の中に居る子供らを

真昼を知らぬ者たちは描く
人間の無限の可能性を
しかも、机の上や会議室の中で
この没落の味は
その結果としてもたらされたもの

陽光の降り注ぐ中においては
僕は何らの可能性も見出せない
誰がこの真昼を没落へと追いやったのか
誰が子供たちを置き去りにしたのか
陽光の降り注ぐ真昼の中に

(1997.10.29)